

失敗の原因を運動能力に帰属させない小学校体育授業のあり方

－原因帰属理論に着目して－

岩崎 紘乃 (群馬大学)

1. 目的

本研究の目的は、小学校の体育授業において、自分の課題に合わせた目標設定、その課題を解決するための見通し、自分の成功の自己認知に関する3つの手立てを積み重ねる授業実践を通して失敗の原因を自分の運動能力に帰属させない授業のあり方を検討することである。

2. 研究方法

1) 対象者：小学校5年生1クラス(33人)

2) 調査方法(マット運動8時間単元)

①自分の課題に合わせた目標設定：スモールステップを組み込んだステップアップカードを作成した。また拡大したカードを各グループに設置し、その場でいつでも確認できるようにした。

②課題を解決するための見通し：正しいイメージを持ってステップを選択、練習できるように、各ステップに映像と動きのポイントを入れた。

③自分の成功の自己認知：成功したら、自分のクリップを動かすことで、完成に向かっていくことを実感できるようにした。教師の指導では、仲間のアドバイスに対する価値づけを行った。

3) 分析方法

①原因帰属アンケート：単元前後に実施し、対応のあるt検定を行った。

②振り返りカード：成功や失敗についてどのように認識しているかを分析した。

③抽出児の選出：単元前アンケートにおける負事態の「能力」「努力・練習」の得点差が最も大きい児童2人(抽出児A、抽出児B)を選出した。

3. 結果と考察

1) 原因帰属アンケート：正事態の「気分・調子」では有意に向上する傾向がみられた。1度成功してもその後毎回成功するとは限らなかったことが影響したと考えられる。「努力・練習」「先生・仲間」は高い値で維持した。カードを使った成功の記録や、

仲間のアドバイスに対する価値づけが影響したと考えられる。なお、負事態の「能力」に有意な差はみられなかった。

2) 振り返りカード：成功を認識する記述が増加した。「手はどこにおくといいかを教えてもらって最後は1人でできるようになりました」とあり、仲間による成功を認知したと考えられる(抽出児A)。

3) 抽出児：抽出児Aは正負ともに「能力」に強く帰属した。失敗すると自信を失いやすいが、成功すると能力に対する自信が高まりやすい特徴があると考えられる。できるようになった補助倒立前転を賞賛されると、挑戦を繰り返していた。抽出児Bは、負事態は「能力」に強く帰属したが、正事態は帰属しなかった。成功しても、能力によるものとは思わない特徴があると考えられる。補助倒立前転ができるようになったが、「できない」と首を振る姿もあった。正事態は「努力・練習」「先生・仲間」に強く帰属し、「運」には帰属しなかった。アドバイスを受けて挑戦を繰り返していたことから、成功を偶然と思わず、自分の努力や仲間に帰属したと考えられる。

4. 結論

本研究の授業実践は、1単元では失敗の能力帰属に影響を与えなかったといえる。しかし、成功を認知する振り返りが増え、抽出児では技能の高まりや自ら挑戦を繰り返す姿がみられた。失敗の能力帰属が増加し始める小学校高学年段階において、一人ひとりの成長や伸びに目を向けた体育授業を、単元を越えて継続していくことが重要であると考えられる。

5. 主な参考文献

1) 伊藤豊彦(1985)スポーツにおける原因帰属様式の年齢的变化について. 島根大学教育学部紀要(教育科学), 19:57-62.

2) Weiner, B. (1979) A theory of motivation for some classroom experiences. Journal of Educational Psychology, 71:3-25.